

# 「呼ぶ」と「招く」の意味分析

## — その多義的意味とコロケーションについて —

鈴木 智美

(2008. 10. 31 受)

【キーワード】 「呼ぶ」、「招く」、類義表現、多義的意味、コロケーション、二次的活性化

### 1 本稿の目的

本稿では、動詞「呼ぶ」および「招く」の意味分析を行う。以下の(1)(2)のような類義表現について、その意味的な違いを明らかにすることが目的である。

- (1) 彼の発言が {疑惑・混乱・反発・誤解・幸運} を呼んだ。
- (2) 彼の発言が {疑惑・混乱・反発・誤解・幸運} を招いた。

いずれも、動詞「呼ぶ」「招く」においては、基本的意味からの派生的用法で、対象となる事態を何らかの意味でこちらへ「引き寄せる」ことを表す。しかし、「呼ぶ」と「招く」を用いた場合は、どのようにその意味が異なるのだろうか<sup>1</sup>。

また、この意味を表す場合、それぞれの動詞とは、どのような名詞が結びつくだろうか。慣習的に両者のコロケーションには違いも見られ、いつでも入れ換え可能なわけではない。

- (3) A 監督の作品解釈が {話題・人気・関心・反響} を呼んだ。
- (4) ?A 監督の作品解釈が {話題・人気・関心・反響} を招いた。

本稿では、以下のような手順で分析を行う。まず、「呼ぶ」および「招く」について、それぞれの多義的意味の全体像を、そのコロケーションに注意を払いながら分析する。次に、両者の違いが問題となる用法に着目し、類義分析を行う。

<sup>1</sup> 同様に事態を「引き寄せる」ことを表すものには、「反感・反発を買う」のような表現もあるが、本稿では分析の対象には含めない。

「呼ぶ」も「招く」も、その中心的意味は、対象を何らかの形で物理的にこちらへ「引き寄せる」動作・行為を表すと思われる。ここで違いを探りたいのは、そこから派生したと思われる抽象的な意味の「引き寄せる」動きであるが、「呼ぶ」と「招く」の中心的意味の違いは、二次的な活性化<sup>2</sup>を経て、この抽象的な意味に影響を及ぼしている可能性がある。したがって、本稿では、それぞれの動詞の多義的意味の全体像を視野に入れながら、両者の違いを分析していくことにする。

なお、本稿では、末尾に「(毎)」と記した例文は、『CD-毎日新聞2005データ集』(日外アソシエーツ、2005年)から採取した実例である。特に記載のない例文は作例である。コロケーションの情報についても上記のデータ集を参考としている。

## 2 先行研究における分析

森田(1989:1198)は、「呼ぶ」と「招く」が事態を引き起こす意味を表す場合、「AがCを招く」が成り立つのは、AとCの間に「因果関係」がある場合であるとしている。例えば、「作品が人気を呼ぶ」はよいが、「?作品が人気を招く」が不自然なのは、「作品」と「人気」とが「因果関係」にないためであるとしている。

ただし、「?作品が人気を招く」が不自然なのは、「人気を招く」というコロケーション自体が、そもそも慣習的になじまないものであることも影響しているのではないかと思われる。例えば、「人気」を生み出す原因となる「作品の斬新さ」などを文脈に加えたとしても、「?作品の斬新さが、人気を招いた」という表現は、やはり慣習的になじまない。抽象的な「引き寄せる」意味で「AがCを招く」という表現が容認可能であるためには、AとCとが因果関係にあるだけでなく、さらにヲ格に立つ名詞句と「招く」との結びつきが、慣習的にコロケーションとして定着していることが必要ではないかと思われる。

また、森田(1989:1197)では、この用法の「招く」は「マイナス評価」の事柄を生起させるものであるとし、小泉他(1989:483)も、「好ましくない事態」を引き起こすものとしている。ただし、第1節の例(2)のように「彼の発言が幸運を招いた」、あるいは「勇気ある決断が勝利を招いた」のような使い方も可能である。したがって、

---

<sup>2</sup> “secondary activation” (二次的・副次的な意味の活性化) のことである。多義語の意味は互いにネットワーク状に関係づけられており、ある1つの意味が活性化されれば、ネットワーク上に結びつけられている他の意味も同時に活性化を受ける。特に、ある語が、比喩的に拡張された意味において用いられた場合には、その語の基本的な意味も同時に副次的に活性化される可能性があるとされる。(Langacker(1987:381-386)、Langacker(1988:69)等を参照。)

「招く」は、必ずしもマイナスの事態のみを引き寄せると言うことはできない。この点も、実際にヲ格に立つ名詞句と「招く」とのコロケーションを幅広く見ることが必要であると思われる。

国広(2006)では、「呼ぶ」の多義的意味が、その派生関係も含めて分析されている。結びつく名詞については、「感動を呼ぶ」などの「人間に関するもの」、「嵐を呼ぶ」などの「環境的な現象」の2つのグループに分けて例が挙げられている。ただし、そこで環境的な現象に含められている「波紋・反響」などは、「論議・共感・評判」などと同様に、人間に関するものと考えてもよいのではないと思われる。また、「呼ぶ」と「招く」との違いについては特に触れられていない。

姫野監修(2004)では、コロケーションの情報を豊富に得ることができるが、個々の語の多義的意味の分析はこの書の目的ではなく、また、類義の語とのコロケーションの違いも、特にそれが際立つ形では示されていない。

以上の各点を踏まえ、本稿では、「呼ぶ」と「招く」との意味の違いを、そのコロケーションの違いにも着目しながら、明らかにしていくことが必要であると考え。まず第3節で「呼ぶ」の多義的意味とコロケーションを分析し、第4節で「招く」の多義的意味とコロケーションを見る。最後に第5節で、「呼ぶ」と「招く」が類義表現として問題となる部分について考察する。

### 3 「呼ぶ」の多義的意味およびコロケーション

#### 3.1 多義的意味[1]〈相手が気づくように〉〈名前などを〉〈声に出して言う〉

- (5) わたしは大声で彼の名前を呼んだ。
- (6) 男はその女優を本名で呼んだ。
- (7) 遠くから「山田さん」と呼んでみた。
- (8) 「もしもし、カードを落としましたよ」と呼び止められた。
- (9) 「子どもと目が合ったら視線を外さない時間を作るように」。研修でそう注意された。[中略]「1日1回は名前を呼ぶ」という指導も受けた。(毎)
- (10) 名刺をもらった時はすぐにしまわないで、相手をフルネームで呼びながら会話してはいかがでしょう。(毎)
- (11) 選手たちは上田監督を「監督」や「先生」ではなく、「上田さん」と呼ぶ。(毎)
- (12) 厚生労働省の検討会が01年末、「患者の姓に『様』を付けて呼ぶ」という指針を打ち出した。(毎)

(13) 急いで避難するように呼びかける。

(14) 国立天文台は「すばるの星々の鋭い輝きと、雲のように浮かぶすい星の淡い輝きの競演を楽しんでほしい」と呼びかけている。(毎)

この意味で「呼ぶ」を用いる場合には、例(5)の「[[名前]を呼ぶ」のように、名前そのものをヲ格にとる場合と、例(6)の「[[相手]を[名前]で呼ぶ」のように、その「呼び方」を示す場合、あるいは例(7)(8)のように「[…]と呼ぶ」という引用の形式を伴った文型をとる場合がある。

「[[相手]を[名前]で呼ぶ」の場合、その「呼び方」としては、「本名・フルネーム・名字・旧姓・ファーストネーム・下の名前・ニックネーム・あだ名・愛称・役職名・敬称・敬称付き・ちゃん付け・カタカナ名・称号・屋号・イニシャル・番号・コード名・隠語」などの例が見られる。

国広(2006:300)も、「呼ぶ」の基本義を「離れたところにいる相手の注意を引いたり、招いたりするために相手の名前を用いて声をかける」こととしており、「相手の注意を引く」ことを「呼ぶ」ことの目的の1つに挙げている。森田(1989:1194)も、「相手の関心や注意を自分のほうに向けようとして声を出す」ことと分析している。

この意味の「呼ぶ」では、例(13)(14)のような「呼びかける」という複合動詞の例も多く見られる。呼びかける内容は、「～を呼びかける」の他、引用の形式を伴い「～と／～よう(に)呼びかける」の形でも示される。例えば、「情報提供を呼びかける」「『情報を提供 |してほしい/してください』と呼びかける」「情報を提供しよう(に)呼びかける」のいずれの形も可能である。

「～を呼びかける」のヲ格に立つ名詞句には、以下のようなものが観察される。

警戒・注意・通報・徹底・支援・協力・協議・交渉・対応・対策・努力・奮闘・連携・提携・和解・協調・話し合い・支持・参加・継続・実現・実施・投票・賛同・結成・提供・募金・献血・購入・調査・点検・受診・開放・整備・防止・再建・建設・構築・増設・改革・活動・運動・抛出・導入・利用・活用・工夫・抑制・自重・自粛・停止・規制・予防・確認・避難・阻止・撤去・廃絶・ボイコット・棄権・追及・抗戦・降伏
---

### 3.2 多義的意味 [2] <ある役割を持った者に><声をかけて><こちらに来させる>

(15) 大声で警察官を呼んだ。

(16) 急いで電話をかけて救急車を呼ぶ。

- (17) 葬式に僧侶を呼ぶ。
- (18) 上司が部下をデスクまで呼びつける。
- (19) 「責任者を呼べ」と怒鳴り込む。
- (20) 不祥事について海老沢会長を参考人に呼んで開かれた衆院総務委員会の集中審議(昨年9月)[略]。(毎)
- (21) トヨタは03年から、海外の従業員を国内工場に呼んで、模範的な作業を学ばせる仕組みを導入し、従業員教育を強化している。(毎)
- (22) 深夜に建設現場を視察し、工事関係者を呼び出して指示するなど「責任感の強さ」の半面、「強引さ」も目立つ。(毎)

「呼ぶ」対象となるものには、例(15)(16)の「警察官・救急車」などの他、「タクシー・医者・医師・看護師・弁護士・僧侶・応援・助け・お巡りさん・ウェイター・ウェイトレス・ボーイ・従業員・部下・係の者・係員・担当者・責任者・当事者・関係者・専門家・業者・代表・会長・役員・幹部・救援部隊・捜査員・証人・参考人・記者・ジャーナリスト」などの例が見られる。

呼ぶ行為を行う側には、何らかの望むところがあり、その目的を達成するために、それにふさわしい役割・働きを持った相手、あるいはそれを担当するしかるべき者に声をかけ、こちらへ来させることを表す。森田(1989:1196)も、「その人間を来させて何かをさせることが目的」であり、「目的に合う特定の職種の人物をことさら招く」ことによって「何か仕事をさせる」と分析している。

国広(2006:300)も、「呼ぶ」の基本義の中に「離れたところにいる相手」という要素を挙げているように、主体と、呼ばれる対象との間にはある程度の物理的な距離があると考えられ、主体は対象に声をかけることによって、それを主体の側へと移動させる。3.1で見た多義的意味[1]が、声をかけて相手を気づかせることが目的であるのと違って、多義的意味[2]は、その相手をさらにこちら側へ移動させることを目的とする。主体の側への対象の線的な移動がイメージされる。

この意味の「呼ぶ」では、「呼び出す」「呼び寄せる」「呼びつける」「呼び戻す」などの複合動詞の例も見られる。

また、以下の例は、この多義的意味[2]と、次で見る多義的意味[3]との連続性が見られる例である。

- (23) ジーコ監督は「招集した国内23選手以外に、どれぐらいの選手が必要かを

見極める」と伝えた。「国内組の調子が良ければ海外組は呼ばない」とのメッセージ[略] (毎)

- (24) スタジオに各分野の人気・著名学者、研究者を呼んで授業をするスタイル。  
(毎)

対象となる「海外組 (海外で活躍する日本人選手)」「学者・研究者」などをこちらへ来させ、「主力選手として参加する」「授業を行う」などの役割を、こちら側の益になるよう果たしてもらうのであれば、この意味 [2] と解釈される。しかし、これらの対象者に、こちらから頼んで「来てもらう」ことを意味するならば、次の意味 [3] であると考えられる。

### 3.3 多義的意味 [3] 〈特別な機会に臨席してもらうよう〉〈相手に〉〈声をかける〉

- (25) 会社の同僚を結婚式に呼ぶ。  
(26) 友人を自宅へ食事に呼ぶ。  
(27) オリンピックで活躍した選手をパーティーに特別ゲストとして呼ぶ。  
(28) 日韓交流のイベントは2年前から始まった。日本人のDJをゲストに呼んで韓国でイベントを行ったり、[略]。(毎)  
(29) 今、長野や島根県の町村で農村再生への試みを考えている。例えば、お年寄りを「地域貢献者」として町や村に次々に表彰してもらう。晴れ舞台には、日ごろ帰らない子供や親せきを呼ぶ。(毎)

多義的意味 [2] とは異なり、相手を「来させる」というよりは、むしろ「客」などの立場として来てもらうことを意味する。

例 (25) の「[[相手に]を[催し・目的]に呼ぶ]」、例 (26) の「[[相手に]を[場所]へ[催し・目的]に呼ぶ]」の形が見られる。また、例 (27) (28) の「[ゲストとして]」「[ゲストに]」のように、「[[相手に]を[催し・目的]に[役割] {に／として} 呼ぶ]」の形をとる場合もある。

多義的意味 [2] と同様に、主体は対象に声をかけることによって、それが主体の側へ移動してくることを意図する。ただし、意味 [2] では、それは「警察官を呼ぶ」「係の者を呼ぶ」など、主体の側を利する目的で「来させる」ものであった。意味 [3] においては、むしろ客として招待する意味を持つ。ある程度の距離と、線的な移動の動きがイメージされることは [2] と共通であるが、目的意識が異なる<sup>3</sup>。

### 3.4 多義的意味 [4]〈人・物・事・時・所に〉ある名前を付けて〉言う

- (30) 幼少の頃から「神童」と呼ばれて育つ。
- (31) DNA は生命の設計図と呼ばれる。
- (32) ハリケーンを「カトリーナ」などと人名で呼ぶ。
- (33) 食べ物を通して生活の基本や健康を守る方法を学ぶことを「食育」と呼ぶ。  
(毎)
- (34) 毎年6月10日を時の記念日と呼んでいる。
- (35) 伊勢神宮から熊野三山へ通じる道は、「熊野古道」と呼ばれる参詣道の1つである。
- (36) 老化ほど個人差が大きいものもない。何歳からお年寄りと呼ぶべきかも難しい。(毎)
- (37) これまで世界貿易機関 (WTO) の多角的貿易交渉を「新ラウンド」と表記してきましたが、11日から「ドーハ・ラウンド」と表記します。「ウルグアイ・ラウンド」(86～94年)のように、数年にわたる交渉が始まった地名を冠して呼ぶのが慣例のためです。(毎)

ある対象に、ある名前・呼び名を付けて言うことを表す。小泉他(1989: 539)に示されている通り、対象をヲ格にとり、名称・呼び名を引用の助詞「と」で受け、「〔人・物・事・時・所〕を〔名前〕と呼ぶ」の形で用いる。ただし、例(37)の「〔対象〕を〔…〕のように呼ぶ」のように、例示の形をとるものも見られる。

多義的意味 [1] とは、因果関係あるいは時間的な近接性の関係によって結びつけられる。意味 [1] のように、相手の名前を声に出して言うことができるのは、この意味 [4] のように、対象にそのような名称が付けられ、それが定着しているからこそである。反対に、対象にある名前を付けて呼び習わすうち、それが名称として定着するということも考えられる。

---

<sup>3</sup> 「今年の正月は単身赴任先のマンションに家族を呼んで迎えた」(毎)などの例は、正月というあらたまった場に家族全員を招き、集まってもらったのだと考えれば、この意味 [3] になる。一方、一家そろって正月を迎えるべく、父親が家族を呼び寄せたのだと考えれば、意味 [2] と解釈してもよい。

### 3.5 多義的意味 [5] 〈ある反応や結果が〉〈こちらに向かってやって来ることを〉〈引き起こす〉

- (38) その映画が今、話題を呼んでいる。
- (39) 政府高官の発言が、疑惑を呼んだ。
- (40) 四つ葉のクローバーは、幸運を呼ぶお守りだと言われる。
- (41) 音楽ファンの中でレコードが静かな人気を呼んでいる。(毎)
- (42) 沖縄県宜野湾市で昨年8月に起きた米軍ヘリ墜落事故で、米側はこの規定を盾に沖縄県警の捜査を拒み、強い反発を呼んだ。(毎)
- (43) 権威主義体制の長期化は人々の自立心を奪い、停滞と腐敗を呼んだ。(毎)
- (44) 小学4～6年生の4割が「太陽は地球の周りを回っている」と考え、[中略]これに対して文部科学省が「中学で体系的に教えている」と反論するなど、教育界も巻き込んで論議を呼んだ。(毎)
- (45) 和平派のアッバス・パレスチナ解放機構(PLO)議長の自治政府議長選での当選は、イスラエル側でも新たな時代への期待感を呼び起こしている。(毎)

多義的意味 [2] や多義的意味 [3] が、物理的に対象を「引き寄せる」動きを表すのに対して、この意味 [5] は、抽象的な意味で対象を引き寄せることを表す。主体となるものが対象となるものを引き寄せる点で、主体と対象との関係は基本的意味と共通である。また、主体と対象との間に距離が介在し、対象が線的な動きをもって引き寄せられるというイメージを持つことも共通であると思われる。

ただし、この意味 [5] の場合には、主体が対象を「意志的」に呼ぶわけではない。森田(1989:1194-1196)も、この意味の「呼ぶ」を、「まわりの事物がおのずから主体側に集まって来る」とし、「その事物・人が原因となって、他の事物が自ずとやってくる無意志的作用の『呼ぶ』」であると分析している。

また、大曾(2002:8)も、「感動を与える」と「感動を呼ぶ」のコロケーションを比較し、「感動を与える」と言えば、与え手の意志が含まれることもあるが、「感動を呼ぶ」は、「自然発生的に『感動』という感情が起こる」と記述している。

なお、第2節で触れたが、国広(2006:303-304)は、この意味の「呼ぶ」がヲ格にとる名詞を「人間に関するもの」および「環境的な現象」の2つのグループに分け、例を挙げている。ただし、実例を見ていくと、厳密に自然現象に関すると思われる

ものは「湿気」などのごく限られたものだけであり、その他は、いずれも人間が関与する物事の結果や反応を示すものとなっている<sup>4</sup>。

具体的には、以下のような名詞の例が見られる。

反響・噂・話題・関心・共感・感動・人気・評判・反発・批判・論議・議論・論争・賛否両論・疑心暗鬼・動揺・衝撃・怒り・疑惑・憶測・謎・事件・思惑・波紋・波乱・反撃・悲劇・災い・幸せ・幸運・福・勝利・優勝・成功・にぎわい・活動・客・爆笑・涙・ツキ・奇跡・勢い・変化・投資・高値・安値・トラブル・センセーション・ブーム・パニック・ミス・反日感情・嵐・春・夏・涼・湿気・新風・春風
---

また、以下の例(46)(47)の「客を呼ぶ」も、この多義の意味[5]と考えられる例である。「披露宴に客を呼ぶ」であれば、意味[3]であるが、この場合は、客を招待するのではなく、客を「集める・引き寄せる」という意味である<sup>5</sup>。

(46) 主力選手がいないと、球場に客が呼べない。

(47) 世界遺産に登録して、大いに観光客を呼び込もう。

この意味の「呼ぶ」は、「呼び込む」「呼び起こす」のような複合動詞の形で用いられる<sup>6</sup>。

## 4 「招く」の多義の意味およびコロケーション

### 4.1 多義の意味[1]〈こちらに来るように〉〈相手に〉〈合図をする〉

(48) ボーイを手で招いた。

<sup>4</sup> 「海苔は湿気を呼びやすい」のような、厳密に自然現象に関するものと思われる例は少ない。「港町に春を呼ぶ、勇壮な『左義長まつり』」(毎)「フキノトウのほかにはないですね。春を呼ぶのになくってはならない素材です。」(毎)なども、自然現象としての季節の変化を言うだけでなく、「人に春の訪れを感じさせるもの」という意味で「春を呼ぶ」が用いられているものと思われる。

<sup>5</sup> 「魅力ある事物が対象を引き寄せる」という意味で、「大きな書店は、そこに住みたいくらい好きです。[中略]本が声をかけてくれるんです。私を呼ぶんですよ。」(毎)、あるいは「開発が海外からの投資を呼ぶ」のような例も、この意味[5]と考えてよいと思われる。

<sup>6</sup> ただし、「呼び起こす」「呼び覚ます」などが、「目覚めさせる・気づかせる」という意味で用いられる場合は、意味[1]との解釈も可能である。例えば、「なつかしい旋律が古い記憶を呼び起こした」「全身の動きが眠っていた五感を呼び覚ます」のような例は、「記憶」や「五感」に働きかけ、それを目覚めさせるという意味を表す。主体と対象との間に心理的に距離は介在するが、その距離を超えて対象をこちらへ「移動させる」ということは意味しないと思われる。

- (49) 先日、上海の繁華街を歩いていたら、おばさんが私を見てうれしそうに手招きした。(毎)

この意味を表す事例は多くはない。ここでは主として「手招き」の動作をすることになり、「呼ぶ」とは違って、必ずしも「声」に出して相手を気づかせる必要はない。森田(1989:1197)も、これを「人を呼び寄せるための手首の動作」とし、「音声は必要条件ではない」と分析している。

#### 4.2 多義的意味 [2] 〈ある目的のために〉〈それに合う役割を持った人に〉〈来てもらう〉

- (50) 恩師を結婚式の披露宴に招いた。  
(51) 著名な研究者を講演に招いた。  
(52) 趣味の仲間を自宅へ食事に招く。  
(53) 外部から専門家を講師に招く。  
(54) 内外の有識者をシンポジウムにゲストとして招く。  
(55) 業界のOBを会長の座に招く。  
(56) 外相は[中略]国連児童基金(ユニセフ)や非政府組織(NGO)の代表を外務省に緊急に招いて具体策の検討に乗り出す方針を明らかにした。(毎)  
(57) 会議場の外では、一般市民や非政府組織(NGO)が自由に参加する集会も開かれた。地元の高校校舎を会場に「世界の中のアメリカ」という討論会が催され、米上下両院議員が発言者に招かれた。(毎)

例(50)(51)の「[相手]を[催し・目的]に招く」、例(52)の「[相手]を[場所]へ[催し・目的]に招く」の形がある。例(53)(54)の「講師に」「ゲストとして」のように、「[相手]を([催し・目的]に)[役割]{に／として}招く」、また例(55)の「会長の座に」のように「[相手]を[地位]に招く」という形も見られる。

「呼ぶ」の多義的意味[3]（「同僚を結婚式に呼ぶ」「友人を自宅へ食事に呼ぶ」等）と近い意味であるように見える。しかし、「招く」の場合には、「呼ぶ」のように、必ずしも「距離的な隔たり」を持った対象が、「線的に移動」して来ることを引き起こすべく、相手に「声をかける」ということを意味するわけではない。「招く」の場合には、その対象に「主体の側／主体の意図する場に存在し、そこで期待される役割を果た

してもらおう]ようになることがポイントであると思われる。必然的に、そのような環境を主体の側で作り出すこと、準備しておくことが伴うことになり、このことは、次の多義的意味[3]にもつながっていく。

#### 4.3 多義的意味[3]〈ある意図しない状況が〉〈引き寄せられ、存在するようになる環境を〉〈こちら側が作り出す〉

- (58) 政府高官の発言が疑惑を招いた。
- (59) 慣行を大きく破る措置決定が社員からの反発を招いた。
- (60) 指揮系統の乱れが現場の混乱を招いた。
- (61) 国家環境保護総局は[中略]必要な措置を取らないと、二酸化硫黄の排出量が年間500万トン増えるなど深刻な環境汚染を招くと指摘した。(毎)
- (62) 勤務の厳しさから産婦人科医を敬遠する傾向がある中、臨床研修制度の必修化が一層の医師不足を招いたとみられる。(毎)
- (63) ユーロ高による不景気感や物価高、税金負担への批判などの市民感情もあり、[中略]こうした世論の動向が反対派の地滑り的な勝利を招いた。(毎)
- (64) お酒に強い・弱いは個人差が大きく、特に上級生からの一気飲み強要は「アルコールハラスメント」にあたる。[中略]そうしたアルコールの害に対する無知や無関心が、時には最悪の結果を招いている。(毎)

この場合の「招く」も、「呼ぶ」が抽象的に対象を「引き寄せる」ことを表す場合(「呼ぶ」の意味[5])と同様に、主体の「意志的」な動きを表すものではない。

この意味の「招く」の場合、ヲ格に立つ名詞には以下のようなものが見られる。

反発・猛反発・批判・誤解・不信感・怒り・憎悪・不満・混乱・混迷・失敗・転落・孤立・分裂・決裂・疲弊・飢餓・劣化・悪化・浪費・被害・悪影響・病気・大飢饉・内戦・内紛・亀裂・腐敗・衰退・緊張・萎縮・懸念・介入・追従・焦り・報復・マンネリ化・不信・イメージダウン・不公平感・過剰反応・停滞・苦戦・争い・ピンチ・いさかい・損失・悲劇・貧困・惨禍・ミス・失点・失敗・リスク・危険・危機・不安定化・不均衡・高騰・長期化・空洞化・デフレ・崩壊・逆転劇・破局・事故・薬害・不祥事・災難・惨事・蔓延・台頭・勝利・成功・幸運・強運・幸せ
--

「勝利」「成功」「幸運」などの語が立つことを考えると、必ずしもマイナス評価の事態のみであるとは言い切れない。しかし、この意味の「招く」が意志的な動きを

表すものでないため、それらの「勝利」や「成功」も、主体の側が意図し、予測した上でもたらされたものであるとは言えない。

また、新聞記事のデータを見ると、以下のように、現代の社会的問題を表す名詞句がヲ格に来る例が非常に多い。

地球温暖化・砂漠化・供給過剰・環境汚染・生態系破壊・競争力低下・消費抑制・財政破綻・財政悪化・社会不安・人材流出・医療不信・政治不信・政治危機・信用低下・信用の失墜・関係悪化・被害拡大・治安悪化・地下水の枯渇・資源の浪費・信賴の喪失・信賴低下・悲劇的な結末・危機的状况・摩擦激化・心身の老化・睡眠不足・体調不良・レベルの低下・モラルの低下・質の低下・品質低下・学力低下・不正行為・不当競争・格差の拡大・エネルギー危機・外交問題・税金の負担増・価格の急騰・株価の急落・資産価値の下落・ウィルス感染・狂乱パブル・モラルハザード(倫理観の欠如)・未曾有の被害・人為的ミス・不適切な運用

「結果」「事態」などの語がヲ格に立つ場合には、どのような結果・事態が引き寄せられたのかを、「|最悪の／不幸な／重大な／不合理な／ずさんな／予期せぬ|結果」、あるいは「|深刻な／異常な／とんでもない／お粗末な／予測できなかった|事態」などのように、何らかの修飾語句を伴って示す。あるいは、以下の例(65)のように、その事態内容を示す名詞句とともに「Nという結果・事態」の形で示す場合も見られる。また、例(66)のように、その結果・事態の内容が内容節で示される例もある。

- (65) 我々は核兵器の拡散という現実の脅威に直面しています。ここで協調して行動を起こさなければ、核拡散の連鎖という事態を招きかねません。(毎)
- (66) 南米エクアドルの南部州で、原油生産の利益配分を求める先住民族がデモを繰り広げ、政府は非常事態を宣言し、国軍が州庁舎や石油関連施設を制圧する事態を招いている。(毎)

## 5 「呼ぶ」と「招く」の類義分析

以上、第3節および第4節の多義的意味の分析の結果から、「呼ぶ」と「招く」は、以下の(67a)および(67b)に示す2つの意味・用法において、類義に近い関係にあることがわかった。

(67) 「呼ぶ」と「招く」の類義関係

- a. 「呼ぶ」の多義的意味 [3]  
〈特別な機会に臨席してもらうよう〉〈相手に〉〈声をかける〉
- 「招く」の多義的意味 [2]  
〈ある目的のために〉〈それに合う役割を持った人に〉〈来てもらう〉
- b. 「呼ぶ」の多義的意味 [5]  
〈ある反応や結果が〉〈こちらに向かってやって来ることを〉〈引き起こす〉
- 「招く」の多義的意味 [3]  
〈ある意図しない状況が〉〈引き寄せられ、存在するようになる環境を〉  
〈こちら側が作り出す〉

また、「呼ぶ」の他の3つの意味、および「招く」の「手で招く」の意味は、「呼ぶ」と「招く」の類義関係が特に問題になるものではないことがわかった。

## 5.1 「呼ぶ」と「招く」の類義分析(1):「相手に来てもらう」意味

- (68) a. 友人を結婚式に呼ぶ。  
b. 友人を結婚式に招く。

両者は、ほぼ似た意味で用いることができるが、それぞれの多義的意味の全体像を視野に入れ、二次的な意味の活性化の観点から考えると、厳密には以下のような点で違いがあると分析できる。

「呼ぶ」の場合には、「呼ぶ」の多義的意味 [1] の〈声に出して言う〉という意義特徴との関連から、「手紙を出す」「電話をかける」など、何らかの言語的な手段を用いた行為のイメージが喚起される。また、「呼ぶ」の多義的意味 [2] の〈こちらに来させる〉との関連から、対象が主体の側へ、ある距離を移動して来る線的な動きがイメージされる。同様に意味 [2] との関連から、それがどちらかと言えば、主体の側を利する目的で行われるものであることも想起される可能性がある。

一方、「招く」の場合には、「招く」の多義的意味 [1] の〈合図をする〉と同様、声をかけることは特に必要とされない。また、「招く」の意味 [2] には、目的に合う役割を持った人に〈来てもらう〉という意義特徴があることから、どちらかと言えば、対象を「客」として招待し、遇する意味が含まれることになる。

## 5.2 「呼ぶ」と「招く」の類義分析(2):「物事を引き寄せる」意味

- (69) a. 彼の発言が、疑惑を呼んだ。  
b. 彼の発言が、疑惑を招いた。

この意味の違いにも、「呼ぶ」と「招く」の多義的意味の違いが、二次的な活性化を経て影響を与えていると考えられる。

「呼ぶ」の場合には、「呼ぶ」の多義的意味[2] (〈ある役割を持った者に〉〈声をかけて〉〈こちらに来させる〉)との関連から、対象がある程度の距離からこちら側にやって来るといふ、線的な移動のイメージが活性化される。一方、「招く」の場合には、「招く」の多義的意味[2] (〈ある目的のために〉〈それに合う役割を持った人に〉〈来てもらおう〉)との関連から、対象となるものを迎えるべく、こちら側がその環境を用意しておくとの意味が喚起されることになる。

「招く」の意味[2] (「招待」の意味)について言えば、対象となる者が招きに応じ、こちらへ来てくれるかどうかは、相手側次第である<sup>7</sup>。「招く」側にできることは、相手が招待に応じてくれた場合に備えて、用意しておくことである。

この時、こちらで環境を用意することと、対象を迎えるという2つの事態は、時間的ないわば近接の関係に置かれていることになる。意味[2]においては、意志的にその準備を行うことになるが、多義的意味[3]においては、こちら側で意志的に環境を整え、準備をして対象を迎えるわけではない。むしろ、意図せずして、ある状況が引き寄せられるような環境を、こちら側で作り出してしまふということになる。意味[2]と意味[3]においては、近接する2つの事態のつながりにおいて、このように「意志性」の有無に反転が生じていると考えられる。

また、このことから、「招く」の多義的意味[3]においては、「そのような事態を引き起こしてしまったのは、こちら側にそのような状況を作り出した責があるからだ」という解釈が生じるのではないかと思われる<sup>8</sup>。先行研究においても指摘されているように、「招く」対象となるのが「好ましくない事態」であることが多いのは、そのためではないかと思われる。

<sup>7</sup> 「招く」の場合には、それに応じるかどうかの決定権は招かれた側にあるのではないかという指摘は、朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座2007年度夏学期「語彙」の講義にて、「呼ぶ」と「招く」の違いについて議論した際、受講生からも指摘された点である。

<sup>8</sup> 『日本国語大辞典 第二版』(第12巻)(2001:490)では、このような「招く」の意味について「それだけの理由があつて、結果を身にこうむる。身に受ける」と記述している。

## 6 まとめ

本稿では、動詞「呼ぶ」および「招く」の意味分析を行った。その結果、ある物事を引き寄せることを表す「{疑惑・混乱・反発・誤解・幸運…}を呼ぶ・招く」のような用法については、以下のような意味の違いがあることがわかった。

- (70) {疑惑・混乱・反発・誤解・幸運…}を呼ぶ。

〈ある反応や結果が〉〈こちらに向かってやって来ることを〉〈引き起こす〉(→ある程度の距離からの線的な移動のイメージを伴う)

- (71) {疑惑・混乱・反発・誤解・幸運…}を招く。

〈ある意図しない状況が〉〈引き寄せられ、存在するようになる環境を〉〈こちら側が作り出す〉(→こちら側に責があるとの意味を伴う)

本稿では、このような意味の違いを、二次的な意味の活性化の観点から、「呼ぶ」「招く」のそれぞれの多義の意味の全体像を見ることによって導き出した。

## 引用文献

- 大曾美恵子(2002)「コーパスから得られるコロケーション情報－『影響、刺激、感動』を中心に－」名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科『言語文化論集』第23巻第2号 pp.3-12
- 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞－理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店
- 小泉 保他(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典 第二版』第12巻 小学館
- 姫野昌子監修(2004)『日本語表現活用辞典』研究社
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Stanford : Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. "A View of Linguistic Semantics." in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company, pp.49-90.

## 用例検索

『CD-毎日新聞 2005データ集』日外アソシエーツ 2005年